

一関市本寺地区における農村女性起業活動の組織成長プロセス Process of Growth of Organization in Woman's Rural Enterprising

○ 北條 紗希*・広田純一**

○ HOJO Saki*, HIROTA Junichi**

1. はじめに

農村女性起業活動とは、農村在住の女性を中心に地域農産物等を活用して行う事業活動で、女性の所得確保や雇用創出、地域特産物の開発、都市との交流等の地域活性化への寄与が期待されている¹⁾。しかし、担い手となる農村女性たちは必ずしも経営者経験や知識を持つとは限らず、組織を設立し運営方法を確立していくには多くの課題がある。

そこで本研究では、農村女性起業活動の組織形成から運営に至るプロセスの中で、どのような課題に直面し、それらの課題解決を通じて女性グループがいかに成長しうるかを、事例調査を通じて明らかにする。調査は2008年11月から2010年1月までの延べ75回の参与観察を中心に、随時活動メンバーからの聞き取り調査を行った。

2. 本寺地区および「骨寺の里」の概要

事例地区である岩手県一関市本寺地区は、県最南部に位置する中山間水田農村地域で、117世帯374人(2006年)が居住、中世荘園絵図(重要文化財)に描かれた景観が現存する地域として国の重要文化的景観に選定されている。本地区では2004年の本寺地区地域づくり推進協議会(全戸加入)設立以降、景観と調和した営農や地域づくりが活発に取り組まれている²⁾³⁾。

「骨寺の里」は2009年5月8日に設立した会員30名(男6人女24人)の任意団体で、レストラン、直売、加工の3班から構成され、一関市が整備した骨寺村荘園休憩所を拠点に、農家レストランと農産物直売所を運営し、骨寺村荘園の案内所窓口業務を担当している。

3. 「骨寺の里」の組織形成プロセス

「骨寺の里」の設立と開業、運営に至るプロセスは大きく6つに分けられる(右表)。

(1)土台作り段階 本寺地区では1960年代から地域でママさんバレーチームや踊りのサークル「あやめ会」を結成、活動してきた。現在の「骨寺の里」加入会員の多くはこの参加者で、ここで培われた人間関係が組織形成に大きく影響している。

(2)動機づけ段階 地域づくり推進協議会主催で2004年に「夢語りの会」ワークショップ(全4回)が行われ、地区の将来の夢として、主に女性から農家レストランや農産物直売所、特産品開発などのアイデアが出された。これが後の起業活動につながっていくことになった。

(3)経験蓄積段階 2004年には引き続き「夢づくりの会」ワークショップが行われ(全3回)、それをきっかけに2005年には5つの実践チームが生まれて、田植え祭や稲刈り祭が始まった。

表1 骨寺の里の組織形成のプロセス

Table.1 Process of Development of "Honetera-no-Sato" Group

年	出来事	段階区分	骨寺の里前史
1960?	JA婦人部、ママさんバレー	①土台作り段階	
1975	あやめ会		
2004	地域づくり推進協議会設立 夢語りの会 夢づくりの会	②動機づけ段階	
2005	田植え祭り・稲刈り祭り		
2006	骨寺村荘園遺跡整備 活用基本計画	③経験蓄積段階	
2007	協議会女性部会設立		
2008.4	臨時案内所、直売所開所	④組織形成段階	
2008.11	組織作り開始		
2009.5.8	骨寺の里設立総会	⑤運営準備段階	
2009.7.11	骨寺村荘園休憩所開所		
2010.1.15	骨寺の里平成21年度総会	⑥実践活動段階	

*岩手大学農学研究科 Graduate School of Agriculture、Iwate University **岩手大学農学部 Iwate University
キーワード：農村女性起業・農家レストラン・文化的景観・農産物直売所

女性達はそこでの昼食提供や農民市（直売）を通じて経験を蓄積していった。

(4) 組織形成段階 「骨寺の里」結成の直接のきっかけとなったのは、2007年の骨寺村荘園休憩所の計画設計ワークショップである。当時市や地域づくり推進協議会には、地区の女性からメンバーを募って、そのグループにこの休憩所での農家レストランの営業を行わせたいという意向があり、休憩所の計画・設計に女性の意見を全面的に取り入れた。さらに、2008年11月には県の普及員も加わって女性グループの組織化を目指した話し合いが始まり、役員を選出や出資金、給料分配方法、規約などが話し合われた。また研修・実習によって、自分たちの活動をイメージしながら、次第に当事者意識が高まっていった。

(5) 運営準備段階 2009年5月に「骨寺の里」が設立されて以降、レストラン班を中心に提供メニューや値段の決定、料理の試食会などが行われたが、班ごとの活動に偏り、3つの班の間の情報交換不足が生じ、人によっては会の活動に参加しづらい状況が生まれた。活動に対する姿勢に差が現れ始め、その結果、たとえばレストラン班と加工班合同による喫茶メニューの提供がレストラン開業（2009年7月）に間に合わないという事態も生じた。

(6) 実践活動段階 開業後は、試行錯誤を通じて比較的早い段階で組織の運営方法を自らに適した形へ確立していき、2～3ヵ月後には運営体制が安定した。その後は、活動の充実を図るようになり、情報交換不足から生じた班ごとの差を埋めるような活動も見られた。2010年1月の総会では1期目の活動の反省と今後の方向性の検討を行って、今期問題となった案件への主体的な対応を模索する動きが見られるようになった。

4. 課題解決・成長のプロセスと活動継続の留意点

「骨寺の里」の活動を主体形成の視点から見ると次の4段階に分けられる。第1は、外部のアドバイスをそのまま採用する受身の段階、第2は、自分たちで考えて、他人のアドバイスを取捨選択していく段階（たとえば、先進事例研修によって、給料分配方法などについては専門家のアドバイスとは異なる自分たちに合った方法を採用した）。第3は、自分たちで積極的に他事例を観察・分析して、まずは「人並み」を目指す段階（たとえば、近隣の類似施設と横並びの料理の値段設定など）。第4は、独自性やオリジナリティを求める段階である（自分たち独自の考え方や運営方法を許容）。

各段階のステップアップには先進事例の研修がきっかけとなっており、経験の少ない農村女性にとって、実体験によるイメージ共有が非常に重要であることが明らかになった。また、できるだけ会員の足並みを揃えることも重要で、事例では組織に対しての疎外感や負い目から一部が会の活動から遠のく問題が発生したが、各自に何らかの役割をあて、さらに会の中で情報交換や交流ができる環境を整えること（積極的な声かけ等）で防ぐことができる。

5. おわりに

骨寺の里はまだ実践活動の開始から1年未満であり、引き続き活動に参加しながら調査を続けていく予定である。最後に、本研究を進める上で、一関市役所及び岩手県中央農業改良普及センターの職員、そして骨寺の里を始めとする本寺地区の住民の皆さんに多大なるご協力を頂いた。ここに付記して謝意を表す。

[引用・参考文献]

- 1) 澁谷美紀(2007):農村女性の世代的特徴から見た起業の促進要因,農村計画学会誌,Vol. 26, No. 1, pp 13-18
- 2) 吉村彩,広田純一(2006):地域づくりにおける地域住民の主体性形成プロセスとその要因-岩手県一関市本寺地区を事例として-,農村計画学会誌,Vol. 25, pp305-310
- 3) 広田純一(2009):一関本寺地区の農村景観保全,日本造園学会誌,Vol. 73, No. 1, pp26-27